まちづくりの三本柱の一つ

第一次産業の再興と振興

特集

「酪農」で新規就農を目指す―菊地さん夫婦

まちづくりの三本柱の一つである「第一次産業の再興と振興」のため、町の一次産業である農業・林業・漁業では、持続的発展を目的に気候風土や資源を活かしながら、さまざまな取り組みやチャレンジが行われています。

そのような中、町の基幹産業である「酪農」で新規就農を目指している方がいます。その方は西庶路在住の菊地晃輔さんとひとみさん夫婦です。これまで全く酪農に携わった経験がないという菊地さん夫婦は、現在、就農に向けた準備を進めており、町内5カ所の牧場で酪農研修を行っています。

コロナ禍や飼料費等の高騰により、日本の酪農は厳しい経営環境にあるといわれていますが、そのような状況で「なぜ酪農なのか」「酪農で何を目指すのか」など、菊地さん夫婦にお話を聞きました。

――なぜ酪農をやろうと思ったのでしょうか。

菊地晃輔さん（以下、**晃輔**）　義父が以前、町議会議員（故中村仁志さん）をやっておりまして、町のために頑張っている姿を見てきました。私たち二人とも白糠町出身なので、いつか義父のように町のために何かをしたいという気持ちがありました。それで、転職を考える機会があったときに、これまでのような会社勤めではなく、一次産業に携わって町の発展の支えになればと考えました。

菊地ひとみさん（以下、**ひとみ**）　私もそれに賛同し、介護の仕事を辞めて一緒に一次産業へ挑戦することにしました。

晃輔　白糠で一次産業といえば、農業のほかにも林業や漁業があり、農業でも畑作だったり、羊を飼ったりとさまざまです。そこで一次産業をやると決めてからインターネットなどを使っていろいろと調べました。私はずっと白糠で暮らしていますので、酪農を身近に感じてはいたのですが、これまで牛を間近で見たことがないことに気づきました。そこから詳しく酪農について調べていくうちに、どんどんと酪農に惹かれていきました。酪農は日本の食を支える大きな存在ですが、日本ではまだ比較的に歴史が浅いので、大きなポテンシャルを秘めた産業です。そこに最大の魅力を感じました。

リスクを負いながらも異業種から新たに「酪農」へ挑戦

菊地さん夫婦の酪農研修は、朝４時に起きて５時半には牧場で餌寄せをします。その後、６時から搾乳や給餌（餌を与えること）を行い、８時頃までには終えます。その後はまた別の牧場へ移動し、給餌や牛舎の掃除などを行います。今は研修中なので、月に６日間の休暇があります。

――酪農に興味を持ったのはいつ頃のことですか。

晃輔　ちょうど3年前です。3年前の5月頃、茶路にある株式会社M&Sで酪農についていろいろとお話を聞かせてもらいました。その後、酪農研修を始めたのですが、それが2年半くらい前になります。

――酪農はなかなか経営が厳しいといわれていますが、不安などはありませんでしたか。

晃輔　研修を始めて少ししてからコロナ禍になりました。学校給食で牛乳が消費されなくなったり、ウクライナ情勢で燃油や飼料費が高騰したりと、酪農経営はますます厳しくなってきましたが、酪農家さんたちはすごく大変な思いをしながらも、みんなで協力しながら頑張っていたのです。そういう酪農家さんたちの姿を間近で見て「強い絆」を感じました。酪農経営が厳しくなってきたことで、むしろ「やってやろう」という気持ちが強くなりました。